

# 徳島ヴォルティスのJ1再挑戦とその取り組み

研究員 井上郷平

## I . 徳島ヴォルティスのこれまでの歩み

徳島ヴォルティスは、大塚製薬サッカー部を前身としたプロサッカークラブであり、徳島県鳴門市にある「鳴門・大塚スポーツパーク ポカリスエットスタジアム」をホームスタジアムとしている。2004年9月に「徳島ヴォルティス株式会社」が設立され、同年12月にJリーグ参入が承認された。

参入初年の2005年度シーズンはJ2で12チーム中9位だったものの、2006年度～2008年度にかけて3年連続最下位となるなど、低迷が続いた。そこで、2009年から、チームを強化することで徳島県民の関心度を上げていくという戦略のもと、メインスポンサーである大塚製薬の協力によりチーム強化費を徐々に増やしていき、選手補強を積極的に行った。その結果、2011年度シーズンでは最終戦までJ1昇格争いを繰り広げ、2013年度シーズンには悲願のJ1昇格が決まった。

その一方で、初のJ1のステージは想像以上に厳しかった。資金力のあるビッグクラブとの力の差は大きく、リーグ戦は年間3勝で最下位に終わり、1年での降格となった。

この経験を糧に、J1昇格だけでなくJ1で戦うことができるチームを作ることを目標に、設立当初から強化部門に携わっていた岡田明彦氏（現・強化本部長）が2015年より強化部長に就任した。そして、「育成型クラブ」を標榜し、才能ある若手選手を発掘、育成していくという方針を打ち出すとともに、方針と合致する指揮官選びに着手した。その後、2017年にスペイン人のリカル



写真1 徳島ヴォルティスイレブン  
© TOKUSHIMA VORTIS



写真2 ポカリスエットスタジアム  
© TOKUSHIMA VORTIS

ド・ロドリゲス氏が監督に就任した。

こうした一貫した強化方針の効果が徐々に結果に表れるようになり、2019年度シーズンはJ1昇格プレーオフに進出し、J1昇格にあと一步に迫った。そして、2020年度シーズンは2度目のJ1昇格とともに、初のJ2優勝を果たした。2021年度シーズンからは新たに同じスペイン人のダニエル・ポヤトス氏が監督に就任し、現在2度目のJ1で激しい戦いを繰り広げている。

## II. 2度目のJ1昇格の効果とコロナ禍の影響

2度目のJ1昇格および初のJ2優勝により徳島県民の関心度は高まり、チームを支えるスポンサーも、2020年度シーズンの95社から翌2021年度シーズンには129社と大幅に増加した。スポンサー料はヴォルティスの収入全体の7割弱を占めており、今後の経営にとって非常に大きな「昇格」効果と言える。なお、阿波銀行も「ユニフォームスポンサー」として協賛しており、これまで7回にわたり「阿波銀行マッチデー」と称し、イベントを実施している。

一方で、新型コロナウイルス感染拡大はチケット収入の減少などの影響をもたらした。具体的には、感染対策として実施されているイベント等の観客収容制限（定員の50%以内）により、年間シーズンチケットの販売が2020年度、2021年度シーズンで中止となった。また、アウェイチームの都道府県が「緊急事態宣言」もしくは「まん延防止等重点措置」対象地域になっている場合、アウェイチームのサポーターの収容を中止するな

どの措置をとったこともあり、2020年度のチケット収入は前年度比で50%ほどの減少となった。

また、県内で感染が拡大し、「とくしまアラート」のステージが引き上げられた場合、スタジアムの周辺で出している企業ブースや飲食ブースを縮小せざるをえず、集客に苦戦する状況が続いている。

## III. 「徳島県民デー」の様子

2021年8月21日にポカリスエットスタジアムで開催された浦和レッドダイヤモンズ戦は、「徳島県民デー」と銘打たれ、さまざまなイベントが実施される予定だった。しかし、県内での感染急拡大に伴い、「とくしまアラート」で初めて国の基準の「ステージⅣ」にあたる「特定警戒」に引き上げられたことを受け、多くの企業ブースの出店が中止となった。そうした中、少しでも観客が楽しむことができる環境を作ろうと、一部企業のブースや飲食ブースの出店は維持された。

スタジアムに入場する際は、入場口で感染対策として検温、手指消毒を徹底している。そして、



写真 3.4 企業ブース（上）、飲食ブース（下）の様子  
© TOKUSHIMA VORTIS



写真 5.6 浦和レッズ戦でのプレーの様子  
© TOKUSHIMA VORTIS

観客席もすべて指定席で、一席分間隔を空けた状態にしている。

今回のゲームは、「オフィシャルスポンサー」である人材派遣会社の「SDセンター」のスポンサーマッチとも銘打たれており、代表取締役社長の小倉理良氏によるキックインなどのセレモニーが行われたあと、キックオフとなった。

試合は徳島ヴォルティスが終始攻める状況が続いたが、後半に一瞬のスキを突かれるかたちで失点し、0-1の惜敗に終わった。

#### IV. 徳島スポーツビレッジと新クラブハウス

徳島ヴォルティスは、スポーツ文化の振興、子どもの健全育成への寄与を目的に、2006年12月に設立された「徳島スポーツビレッジ (TSV)」(板野郡板野町)を練習拠点としている。TSVでは徳島県内だけでなく、四国4県のサッカー公式戦などが行われており、子どもから高齢者まですべての世代がプロ選手と同じグラウンドでサッカーを楽しむことができる、四国の代表的なサッ



写真 7.8 徳島スポーツビレッジのグラウンド  
(2021年8月23日、筆者撮影)



写真 9 新クラブハウス① (外観)  
(2021年8月23日、筆者撮影)

カー施設として定着している。

さらに、チームスタッフ、フロントスタッフの増加でクラブハウスが手狭になったことなどを受け、2021年3月にTSV内に新たなクラブハウスが建設され、4月より使用が開始された。新クラブハウスは木造2階建てで、県産のスギがふんだんに使用されているほか、柱材を重ねて空間を作る「重ね梁構法」の手法が使われている。

施設内は、1階に事務所と強化部スタッフ3人の専用室が設けられたほか、2階には選手からの強い要望により食堂が新設され、管理栄養士によって考えられた食事が提供されている。また、旧クラブハウスも改装し、トレーニングルームは以前のもの約2倍に拡大されるなど、チーム強化に向けた環境づくりが進められている。

#### V. 徳島ヴォルティスの今後

設立当初より、長年徳島ヴォルティスの経営に携わってきた常務取締役の富本光氏によると、存在自体を認知してもらうところからスタートした時代と比べ、徐々に県民に愛され、応援される存在になってきたことを実感しているという。そのうえで、さらに「徳島県の誇りとなり活性化に貢献できる存在」になることが我々スタッフの使命であると強調した。

2015年以降の若手選手中心の育成方針は、チーム強化にとどまらず、Jリーグの中で「若手育成に定評のあるチーム」という評判をもたらし、選手獲得にもプラス効果となった。今後は、さらに

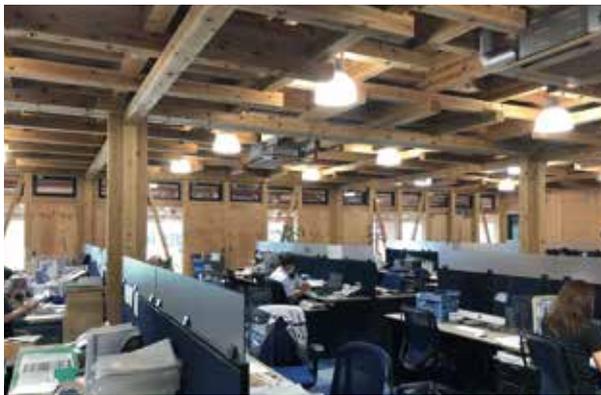


写真 10.11 新クラブハウス② (室内)  
 (上) 天井が「重ね梁」で作られている  
 (下) 奥の壁は阿波藍で染めたもの  
 (2021年8月23日、筆者撮影)

「育成型クラブ」を進化させ、徳島県からヴォルティスや海外で活躍するプロ選手を多く輩出することが、クラブの大きな目標の一つとなっている。

また、サッカー教室のほか、成人の健康維持や幼児の運動能力向上に関する事業を地方自治体と共同で実施するなど、地域に寄り添い、さまざまな地域課題を解決することにも注力している。

近年はキャリア採用を行うなど、フロントの運営体制強化も積極的に行い、設立当初と比べスタッフ数も大幅に増加している。入社希望理由には「Jリーグクラブで働きたい」だけでなく「地



写真 12 新クラブハウス③ (食堂)  
 (2021年8月23日、筆者撮影)

域貢献ができると感じた」との回答も多く、徳島ヴォルティスがプロサッカークラブの一つというものにとどまらず、地域の発展に貢献できる存在になりつつあることを、冨本氏は改めて気づかされたという。

最後に、「ぜひヴォルティスを応援したい」と思った際は、個人であれば、公式 HP からファンクラブ「CLUB VORTIS」の個人会員になることで、チケット購入時の優遇だけでなく、会員限定の応援グッズの購入、景品との交換可能な独自のポイント獲得、「VORTIS 応援ショップ」登録店での優待サービスなどの特典を受けることができる。

また法人であれば、法人会員になることで個人会員と同様の特典があるほか、ホームゲーム引換券の進呈、ヴォルティスの制作媒体への社名掲出といったサービスを受けることができる。

多くの県民が実際にスタジアムに足を運び、応援することが、選手、スタッフにとって大きな力になる。これを機会にファンクラブの一員となり、臨場感あふれるスタジアムで応援してみませんか。

図表 徳島ヴォルティスのエンブレムとロゴ

